

神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

Comentaries on the Zhongguo xiaoshuo shilüe (Lu-xun's a brief history of Chinese fiction) (IV)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 1987-12-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 中嶋, 長文, Nakajima, Osafumi メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/2248

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



中國小說史略考證 第四

中 島 長 文

第四篇 今所見漢人小說

1 此群書中、有稱東方朔班固撰者各二

寫印本『大略』四云、今所謂漢人小說中、稱東方朔撰者二。

又云、稱班固撰者二。

三十四

2 稱東方朔撰者有『神異經』一卷、以至亦偽

三十七

寫印本『大略』四云、(一)神異經一卷、大略仿山海經、惟略于山川道里而詳異物、間有嘲諷之辭。其文有重複者、蓋嘗散佚、後人抄類書復作之。引用是『史略』所引三則の他「窮奇」一條を引く。なお鉛印本は冒頭の一段よりここに至るまで、ただ「山海經」[「稍顯于漢而」の五字を缺くのみで、他は「史略」に同じい。

「小説的變遷」第一講云、至于現在所有的所謂漢代小説、却有稱東方朔所做的兩種。一、『神異經』、二、『十洲記』。班固做的、也有兩種。一、『漢武故事』、二、『漢武帝內傳』。此外還有郭憲做的『洞冥記』、劉歆做的『西京雜記』。『神異經』的文章、是仿『山海經』的、其中所說的多怪誕之事。現在學一條出來。西南荒經、訛獸を引く、從略。

『直齋書錄解題』卷二云、神異經一卷、稱東方朔撰、張茂先傳。十洲記一卷、亦稱東方朔撰。二書詭誕不經、皆假託也。漢書本傳叙朔之辭末言、劉向所錄朔書具矣、世所傳他事皆非也。贊又言朔之談諧、其事浮淺行於衆庶、而後世好事者、因取奇言怪語、附著之朔、故詳錄焉。史家欲祛妄惑、可謂明矣。

『少室山房筆叢』卷三、四部正譌下云、神異經、十洲記、俱題東方朔撰、悉假託也。其事實詭誕亡論、卽西漢人文章、有此類乎。漢志有東方朔二十篇、列雜家、今不傳、而二書傳。甚矣、世好奇者衆也。

『四庫提要』卷一四二、小說家類云、神異經一卷、舊本題漢東方朔撰、所載皆荒外之言、怪誕不經、共四十七條。陳振孫書錄解題已極斥此書稱東方朔撰張茂先傳之僞。今考漢書朔本傳、歷叙朔所撰述、言凡劉向所錄朔書俱是、世所傳他事皆非。其贊又言、後世好事者、取奇言怪語、附著之朔云云。則朔書多出附會、在班固時已然。此書既劉向七略所不載、則其爲依託更無疑義。晉書張華本傳亦無註神異經之文、則併華註亦似屬假借。振孫所疑誠爲有見。然隋志載此書、已稱東方朔撰張華註。則其僞在隋以前矣。觀其詞華綺麗格近齊梁、當由六朝文士影撰而成、與洞冥拾遺諸記先後並出。故其中西北荒金闕銀盤明月珠事、陸倕石闕銘引用之。其中玉女投壺事、徐陵玉臺新詠序引用之。流傳既久、固不妨過而存之以廣異聞。(後略)

鹽谷澁『支那文學概論講話』第六章三六五頁云、神異經一卷(略)その内容は全く山海經を學んで出來て居ります。四荒の事を述べ、頗る怪誕不經でありますが、唐の詩人は多く材を此中に取つてその才藻を養つたのであります。たとへば本書には山海經の西王母に對して東王公といふのがあります。(中略)又崑崙山に希有と名づくる大鳥があつて、左翼を張つて東王公を覆ひ、右翼は西王母を覆つて居ります。而してその背上の羽なき處一萬九千里もあり、西王母は毎歲その翼上に登つて東王公に會すといふ話は、(中荒經)、山海經の三青鳥より出で、やがて七夕の鵲のわたせる

橋も、此邊から出たのではあるまいかと思はれます。(後略)

「間有嘲諷之辭」とは、たとえば例に引く「訛獸」やその他「窮奇」「聖人」「號號」の類を言うか。

「山海經」の通行については郭璞序、また218にあげた『四庫提要』が参考になる。

郭璞『山海經』序云、世之覽山海經者、皆以其闕誕迂誇、多奇怪俶儻之言、莫不疑焉。(中略)而譙周之徒、足爲通識瑰儒、而雅不平此、驗之史考、以著其妄。司馬遷叙大宛傳亦云、自張騫使大夏之後、窮河源、惡覩所謂崑崙者乎。至禹本紀山海經所有怪物、余不敢言也。不亦悲乎。若竹書不潛出於千載以作徵於今日者、則山海之言、其幾乎廢矣。若乃東方生曉畢方之名、劉子政辨盜械之尸、王順訪兩面之客、海民獲長臂之衣、精驗潛效、絕代懸符。於戲、群惑者其可以少寤乎。是故聖皇原化以極變、象物以應怪、鑿無滯蹟、曲盡幽情、神焉度哉、神焉度哉。蓋此書跨世七代、歷載三千、雖暫顯於漢、而尋亦寢廢。其山川名號、所在多有舛謬、與今不同、師訓莫傳、遂將湮泯。道之所存、俗之所喪、悲夫。余有懼焉。故爲之創傳、疏其壅闕、闢其葑蕪、領其玄致、標其洞涉。庶幾令逸文不墜于世、奇言不絕於今、夏后之迹、靡刊於將來、八荒之事、有聞於後裔、不亦可乎。夫藝會之翔、叵以論垂天之凌。蹄涔之遊、無以知絳虬之騰。鈞天之庭、豈伶人之所躡。無航之津、豈蒼兕之所涉。非天下之至通、難與言山海之義。嗚呼、達觀博物之客、其鑒之哉。四部叢刊本

「其文頗有重複者」とは、「栗樹」「不盡木」「樸文」がその例である。

許廣平『魯迅回憶錄』三、魯迅の講演與講課云、當我自己¹在課堂上聽着講『中國小說史略』時、也許我們聽講時的程度低、僅止體會到以下一些也難說。魯迅對我們講『中國小說史略』的時候在早期、那時的書還剛剛在北大第一院的新潮社出版、我們就人手一冊地拿這分裝成上下冊的『中國小說史略』做課本了。講前三篇的時候、因爲課本還沒有印

出、就用中國的油光紙臨時印的、現在手邊沒有了。但那上下冊的兩箇課本、還在身旁、就從這引起我的「二回憶」、以告沒有聽講過的讀者。但也只是一鱗一爪、未必完整的。如第四篇「今所見漢人小說」、他明確地指出、「現存之所謂漢人小說、蓋無一眞出于漢人、晉以來、文人方士皆有僞作、至宋明尚不絕。」大旨不離乎言神仙的東方朔與班固、前者屬于寫神仙而後者則寫歷史、但統屬于文人所寫的一派。『神異經』亦文人作品。而道士的作品之不同處則帶有恐嚇性。有時一面講一面又從科學的見地方斥古人的無稽、講到「南荒經」的魃蟲、至今傳說仍存小兒胃中、魯迅就以醫學頭腦指出此說屬謬、隨時實事求是地分析問題。在「西南荒經」上說出訛獸、食其肉、則其人言不誠。魯迅又從問路說起、說有人走到三岔路口、去問上海人（舊時代）、則三箇方向的人所說的都不同。那時問路之難、是人所共知的。魯迅就幽默地說、「大約他們都食過訛獸罷！」衆大笑。「中荒經」載西王母每歲登翼上會東王公。魯迅說、「西王母是地名、後人因母字而附會爲人名、因西有王母、更假設爲東有王公、而謬說起來了、猶之牽牛織女星的假設爲人、烏鵲填橋成天河、卽與此說相仿、爲六朝文人所作、遊戲而無意。」他隨即在黑板上繪出中央一柱狀爲「翼」、東王公西王母相遇于中央的狀況、更形象地使人們破除了流傳西王母故事的疑團。

3 所引『神異經』

三一九

增訂漢魏叢書本、子書百家本に同じ。

4 『十洲記』一卷、以至亦頗仿『山海經』

三十四

寫印、鉛印兩本とも「亦題東方朔撰」の一句を缺き、「刀延朔問其所在及所有之名」に作るほかは『史略』に同じい。榮校本「所在及」三字を脱す。初版、二版は脱しないが三版以下すべて脱す。しかしここは『神異經』の内容から考ふるに、この三字は誤って脱したもので、補うべきだと思われる。

「小說的變遷」第一講云、『十洲記』是記漢武帝聞十洲于西王母之事，也仿『山海經』的，不過比較『神異經』稍微莊重些。（中略）然而『神異經』、『十洲記』，爲『漢書』藝文志上所不載，可知不是東方朔做的，乃是後人假造的。

『海內十洲記』篇首云，漢武帝既聞王母說八方巨海之中有祖洲瀛洲玄洲炎洲長洲元洲流洲生洲鳳麟洲聚窟洲。有此十洲，乃人跡所稀絕處。又始知東方朔非世常人。是以延之曲室，而親聞十洲所在所有之物名，故書記之。方朔云，臣學仙者耳，非得道之人。以國家之盛美，將招名儒墨於文教之內，抑絕俗之道於虛詭之迹，臣故輶隱逸而赴王庭，藏養生而侍朱闕矣。（後略）顧氏文房小說本。

『郡齋讀書志』卷二下，傳記類云，十洲記一卷，右漢東方朔撰。班固贊言，朔之談諧，逢占射覆，其事浮淺，童兒牧豎，莫不眩耀，而後世好事者，因取奇言怪語，附著之朔，豈謂此書之類乎。

晁載之『續談助』鈔跋云，右鈔世所傳漢太中大夫東方朔所撰海內十洲記。朔之自序其略曰，（序略）按朔雖多怪誕詆欺，然不至於著書妄言，若此之甚。疑後人借朔以求信耳。然李善注文選郭景純遊仙詩，已云東方朔十洲記曰，臣故輶隱逸而赴王庭，藏養生而侍朱門矣，則此書亦近古所傳也。（後略）

陳氏『書錄解題』，胡氏『筆叢』すでに前條に見ゆる。

『四庫提要』卷一四二，小說家類云，海內十洲記一卷，舊本題漢東方朔撰。略觀其引衛叔卿事，知出神仙傳後，引五岳眞形圖事，知出漢武內傳後，然自隋志已著錄。李善註張衡南都賦宋玉風賦鮑照舞鶴賦張衡思元賦曹植洛神賦郭璞遊仙詩第一首第七首江淹擬璞遊仙詩夏侯元東方朔畫贊陸倕新刻漏銘，並引其文爲證。足見其詞條豐蔚，有助文章。陸德明經典釋文，亦莊子北冥條下引此書曰，水黑色謂之冥海，無風淇波百丈。則通儒訓詁且據其文矣。唐人詞賦引用尤多，固錄異者所不能廢也。諸家著錄或入地理，循名責實，未見其然，今與山海經同退置小說家焉。

鹽谷溫『支那文學概論講話』第六章三六八頁云、海内十洲記一卷(古略)本書も亦前申す通り東方朔の撰と稱せられて居りますが、固より假託であります。開卷第一に本書の緣起が詳に載せてあります、それによると漢の武帝が西王母より八方巨海の中に祖洲・瀛洲・玄洲・炎洲・長洲・元洲・流洲・生洲・鳳麟洲・聚窟洲の十大洲あり、人跡の稀なる處なるを聞き、又始めて東方朔の常人に非るを知り、乃ち朔を曲室に延いて親しく十洲の所在、並びに產物等につきて尋ねられました。因て朔は一々己れの知れる所を述べ、海内十洲及び滄海島・方丈洲・扶桑・蓬丘・崑崙の位置物産等を擧げて奉答致しました。之を筆記したものが即ち本書であります。按ずるに武帝が西王母より十洲の話を聞いたことは漢武内傳に出で、武帝が東方朔の異人なるを知つたことは漢武故事に出て居ります。されば本書は右兩書に續いで出來た小説で、互に相關聯したものであります。殊に本書に上といふべきを漢武帝といひ、その諡號を用ふる如きは益々朔の撰でないことが明白であります。／鳳麟洲の續弦膠や、聚窟洲の反魂樹は極めて有名であります、崑崙山や西王母も本書に至つて理想化せられました。(中略)是に至つては西王母はもはや鬼物異形ではありませぬ。全く神仙であります。而してその容貌は漢武内傳に詳かに記載されて居ります。

許廣平『魯迅回憶錄』三、魯迅的講演與講課云、談到『十洲記』、亦題東方朔撰、但中有恐嚇的話、故魯迅疑爲道士所作。其中宮室有金芝玉草、服食有龍肝鳳肺、居住有仙宮、都是道士特意寫的、與常人不同。又如武帝時、西胡月支獻香四兩、燒于城內能起死回生、于是信知其神、「乃更秘錄餘香、後一旦又失之。」已經是故神其說、從空想的香的不是凡品、又入到事實上以堅人信、如果厚待月支使者、則「帝崩之時、何緣不得靈香」、是道士怕人不相信、故爲此語。這都是他隨講解而分析的。

『海内十洲記』云、聚窟洲在西海中申末之地、(略)洲上有大山、形似人鳥之象、因名之爲神鳥山。山多大樹、與楓木相類、而花葉香聞數百里、名爲反魂樹。扣其樹亦能自作聲、聲如群牛吼。聞之者皆心震神駭。伐其木根心於玉釜中煮取汁、更微火煎如黑錫狀、令可丸之、名曰驚精香、或名之爲震靈丸、或名之爲反生香、或名之爲震檀香、或名之爲人鳥精、或名之爲却死香、一種六名、斯靈物也。香氣聞數百里、死者在地聞香氣、乃却活不復死也。以香薰死人、更加神驗。征和三年、武帝幸安定、西胡月支國王、遣使「大略」「史略」此的四字を脱す。獻香四兩、大如雀卵、黑如桑椹。帝以香非中國所有、以付外庫。又獻猛獸一頭(以下略)。到後元元年長安城内病者數百、亡者太半。帝試取月支神香燒之於城内。其死未三月者皆活、芳氣經三月不歇。於是信知其神物也。乃更秘錄餘香、後一旦又失之。檢函封印如故、無復香也。帝愈懊恨、恨不禮待於使者、益貴方朔之遺語、自愧求李君之不勤、慙衛叔卿於堦庭矣。明年、帝崩于五柞宮、已亡月支國人鳥山震檀却死等香也。向使厚待使者、帝崩之時、何緣不得靈香之用耶。自合命殞矣。顧氏文房小説本魯迅が據ったテキストは確定できないが、次條の「篇首云」まで含めて校對すれば、道藏本、續談助本、顧氏文房小説本でないことは確かである。魯迅引用の文と一致するのは、増訂漢魏叢書本、子書百家本等である。「芳氣經三月、不歇」の「月」字、訂正版から三十年集版まで「日」字に作る。「其死未三月者」の「月」字を「日」字に作るのは道藏本だが、「芳氣云々」の方を「三日」に作るテキストは未見。これは寫印本『大略』より七版に至るまでのように「三月」に作るべきだろう。五七年版全集は元にもどしている。また寫印本『大略』より三十年集版まで「已亡月支國人鳥山」の「山」字を缺くが、五七年版ではじめて「山」字を補ってテキストに合せた。なお引用二則は『大略』兩本とも『史略』に同じい。

6 東方朔雖以滑稽名、以至解嘲之作而已

寫印本『大略』四云、漢書朔傳贊云、朔之詼諧逢占射覆、其事浮淺、行于衆庶、兒童牧豎、莫不眩耀、而後世好事者、因取奇言怪語、附著之朔。則漢世于朔、已多附會之談。二書文詞華麗、蓋出僞託。而隋志已著錄、齊梁文人亦引爲故實、則造作當在晉宋時。神異經雖多神仙家言、然文思較深茂、或是文人所爲。十洲記淺薄、觀其記月支反生香、及篇首云、方朔云、臣學仙者也。非得道之人。以國家之盛美、將招名儒墨于文教之內、抑絕俗之道于虛詭之迹。臣故輒隱逸而赴王庭、藏養生而待朱闕。則方士藉以震眩流俗、且自解嘲之作而已。鉛印本は『史略』に同じい。前條4所引「小説的變遷」第一講を參看。『大略』『史略』と評價をいささか殊にする。

鹽谷溫『支那文學概論講話』第六章三六四頁云、神異經一卷(中略)東方朔は虞初等と同じく、博識智辯を以て漢の武帝に寵幸せられた、稗官的人物であります。我國でいへば恰も滑稽を以て豐太閤に寵せられた、曾呂利新左衛門の格であります。漢書の論贊にも、朔之詼諧、逢占、射覆、其行事浮淺、行於衆庶、童兒牧豎、莫不眩耀、而後世好事者、因取奇言怪語、附著之朔と述べてあります。又同書藝文志の雜家の部に、東方朔二十篇の目が見えて居りますが、惜しいことには後に傳はりませぬ。その作と稱せらるゝものは、僅に此神異經と、次に掲ぐる海内十洲記との二種が漢魏叢書中に收められてありますが、勿論傳會に出づるものであります。今の本には晉の張華の注があります。張華は博覽多識の人で、その著に博物志がありますけれども、神異經の注釋を作つたといふことは本傳にも記してありませぬ。さればその注も亦假託に屬するのであります。然し隋書の經籍志には明に東方朔撰張華註となつて居りますから、その僞作は可なり古く、隋以前であることは確であります。四庫全書提要には神異經の詞華縟麗なる所より推して、六朝の文士の手に成つたものであらうと斷じてあります。

『漢書』卷六五、東方朔傳云、贊曰、劉向言、少時數問長老賢人通於事及朔時者、皆曰朔口諧倡辯、不能持論、喜爲庸人誦說、故令後世多傳聞者。而楊雄亦以爲朔言不純師、行不純德、其流風遺書蔑如也。然朔名過實者、以其談達多端、不名一行、應諧似優、不窮似智、正諫似直、穢德似隱。非夷齊而是柳下惠、戒其子以上容、首陽爲拙、柱下爲工、飽食安步、以仕易農、依隱玩世、詭時不逢。其滑稽之雄乎。朔之談諧、逢占射覆、其事浮淺、行於衆庶、童兒牧豎、莫不眩耀。而後世好事者、因取奇言怪語、附著之朔、故詳錄焉。

『隋志』地理類云、十洲記一卷東方朔撰。神異經一卷東方朔撰、張華注。

『齊梁文人亦往往引爲故實』については、前條2、4に引く『四庫提要』參看。

7 稱班固作者、以至然後人遂徑屬班氏

三四十六

寫印本『大略』四云、稱班固撰者二。(一)『漢武帝故事』一卷、記孝武生于猗闌殿至崩葬茂陵雜事、且下及成帝時。時有神仙怪異之言。『隋志』著錄二卷、不云班固作、晁公武郡齋讀書志說、唐張柬之書洞冥記後云、漢武故事、王儉造也。鉛印本は『史略』に同じ。

「小説の變遷」第一講云、班固做的、也有兩種。一、『漢武故事』、二、『漢武帝內傳』。(中略)『漢武故事』和『漢武帝內傳』、都是記武帝初生以至崩葬的事情。(中略)『漢武故事』、『漢武帝內傳』則與班固別的文章、筆調不類、且中間夾雜佛家語——彼時佛教尙不盛行、且漢人從來不喜說佛語——可知也是假的。

『古小説鈎沈』に『漢武帝故事』五十條を蒐集。

『隋志』舊事類云、漢武帝故事二卷。

『郡齋讀書志』卷二下、傳記類云、漢武故事二卷、右世言班固撰、唐張柬之書洞冥記後云、漢武故事、王儉造。

『續談助』卷一、『洞冥記』鈔跋云、右鈔郭子橫所撰漢武帝別國洞冥記。子橫之論、以爲漢武明特備異之主、東方朔因滑稽誕誕以匡諫、洞心於道教、使冥跡之奧、貽然顯著。故撰記名之洞冥。而張柬之言、隨其父在江南、拜父友孫義強、李知續、二公。言似非子橫所錄。其父乃言、後梁尙書蔡天實與岳陽王啓、稱湘東昔造洞冥記一卷。則洞冥記梁元帝時所作。其後上官儀應詔詩中用影娥池。學士時無知者。祭酒彭陽公令狐德棻召柬之等十餘人問此出何書。柬之對、在江南見洞冥記、云漢武穿影娥池於望鶴臺西。於是天下學徒、無不繕寫。而尋劉歆阮籍七錄、了無題目。貞觀中、撰文思博要、藝文類聚。紫臺丹笥之祕、罔不咸集、亦無採掇。則此書僞起江左、行於永禎明矣。昔葛洪造漢武內傳、西京雜記、虞義造王子年拾遺錄、王檢造漢武故事、並操觚鑿空、恣情迂誕。而學者耽閱以廣聞見、亦各其志、庸何傷乎。按柬之所稱湘東所造洞冥記一卷、而此分爲四。然則此書亦未知定何人所撰也。又此書記曼倩父張氏、而王充論衡道虛篇、復言朔姓金氏。神仙道家之言、其荒誕舛錯、類皆如此。故并鈔之、以廣聞見、且使後生知雜家小說爲不足多尙。此余之志也。

『少室山房筆叢』卷二九、九流緒論下云、漢武故事、稱班固撰、諸家咸以王儉造。考其文頗衰繭、不類孟堅、是六朝人作也。史記公孫弘諫征伐、不從自殺。而鉤弋夫人以病終、非武帝殺之。皆與史大異。吾以弘斷不能自殺、知鉤弋之說、爲六朝之妄無疑也。然仙傳亦有鉤弋事、蓋祖此云。

『四庫提要』卷一四二、小說家類云、漢武故事一卷 舊本題漢班固撰。然史不云固有此書、隋志著錄傳記類中、亦不云固作。晁公武讀書志引張柬之洞冥記跋、謂出於王儉。唐初去齊梁未遠、當有所考也。所言亦多與史記漢書相出入、而雜以妖妄之語。然如藝文類聚、三輔黃圖、太平御覽諸書所引甲張珠簾、王母青雀、茂陵玉腕諸事、稱出漢武故事者乃皆無之。又李善註文選西征賦引漢武故事二條。其一爲柏谷亭事、此本亦無之。其一爲衛子夫事、此本雖有之、而文反略於

善註。(略)此本爲明吳瑄古今逸史所刻、併爲一卷、僅寥寥七八頁、(略)以其六朝舊帙姑存備古書之一種云爾。

鹽谷澠『支那文學概論講話』は「金屋藏嬌」「神君」を、前者は要約して、後者は原文を引く。

「頗不信方士」とは、「變大腰斬」「淮南王安」「田千秋奏請」等の事を言う。

許廣平『魯迅回憶錄』三、魯迅的講演與講課云、關於「金屋藏嬌」、原出于『漢武帝故事』、他四歲時、人間欲得婦否、答以欲得、指左右百餘人、皆云不用、末指阿嬌好不。乃笑對曰、「好、若得阿嬌、當作金屋貯之也。」後人移用于納妓、說是「金屋藏嬌」、實乃大誤。

8 所引『漢武帝故事』

三十二

『大略』兩本所引に同じい。信賴すべきテキストがないので、基本的には『古小説鈎沈』本に據るらしいが、間々省略がある。西王母の話では、「有二青鳥如鳥」の「如鳥」二字、寫印本にはあるが、鉛印本より脱す。「與帝五枚」の「五」字、寫印本をはじめ三十年集版に至るまで「二」に作り、五七年版ではじめて「五」に訂す。「母笑曰」の「曰」字、寫印本脱し、また「五更」を「吾更」に誤る。さらに「久被斥逐」の「逐」字は、『鈎沈』本、『大略』兩本、初版より七版まですべて「退」字に作る。訂正版より「逐」字に改められるが、誤植の可能性もある。

9 其一日『漢武帝內傳』、以至因連類依托之

三十一

寫印本『大略』四云、(一)漢武帝內傳一卷、亦記孝武初生至崩葬事、而於王母降特詳。文辭雖繁麗而淺薄、事則本十洲記及漢武故事、可知造作更在二書之後矣。(引用一段從略、次條10參看)宋時雖云漢武故事「世言班固造」(晁氏說)、而內傳尙不題撰人、至明始並稱班固作、蓋以固名重、因依托之。鉛印本は『史略』に同じい。「小説的變遷」は前條7參看。

『續談助』卷四、漢孝武內傳鈔跋云、右鈔漢孝武皇內傳。其言淺陋、又什有五六皆增贅漢武故事與十洲記。(後略)

『郡齋讀書志』卷二下、傳記類云、漢武內傳二卷、右不題撰人、記王母降。

『少室山房筆叢』卷三二、四部正譌下云、漢武內傳、不著名氏。詳其文體、是六朝人作、蓋齊梁間好事者爲之也。

(後略)

『四庫提要』卷一四二、小說家類云、漢武帝內傳一卷、舊本題漢班固撰。隋志著錄二卷、不註撰人。宋志亦註曰不知作者。此本題曰班固、不知何據。殆後人因漢武故事僞題班固、遂併此書歸之歟。漢書東方朔傳贊稱、好事者取奇言怪語、附著之朔。此書乃載朔乘龍上昇、與傳贊自相矛盾、其不出於固、灼然無疑。其文排偶華麗、與王嘉拾遺記、陶宏景真誥體格相同。考徐陵玉臺新詠序有靈飛六甲高擲玉函之句、實用此傳六甲靈飛十二事封以白玉函語、則其僞在齊梁以前。(中略)又考郭璞遊仙詩、有漢武仙才句。與傳中王母所云、殆恐非仙才語相合。葛洪神仙傳所載、孔元方告馮遇語、與傳中稱受之者四十年傳一人、無其人、八十年可頓受二人、非其人、謂之泄天道、得其人不傳、是謂蔽天寶云云相合。張華博物志載漢武帝好道、西王母七月七日漏七刻、乘紫雲車乘云云、與此傳亦合。今本博物志、雖真僞相參、不足爲證、而李善註文選洛神賦、已引博物志此語、足信爲張華之舊文。其殆魏晉間文士所爲乎。陸德明莊子釋文註大宗師篇、西王母亦引漢武內傳、云西王母與上元夫人降、帝美容貌、神仙人也。事與今本所載同、而文句迥異、或德明隱括其詞歟。(後略)

「竊取釋家言」とは、たとえば所引後半にある上元夫人の言葉「將以身投餓虎、忘軀破滅、蹈火履水」などがそれであろう。寫印本と鉛印本では後半の引用がちがうのもそのためである。

「至明乃并『漢武故事』皆稱班固作」とは、明代の版本、たとえば明正統(四〇〇—一〇九)『道藏』本、何允中『廣漢魏

叢書』本等「班固」撰と題する。

許廣平『魯迅回憶錄』三、魯迅の講演與講課云、魯迅講書、不是逐段逐句的、只是在某處有疑難的地方纔加以解釋。如說到『漢武帝內傳』時、他首先講出、故事是文人所作、內傳是則爲道士所作。道士是反對佛教的、而『漢武帝內傳』于王母降臨的描寫則多用佛語、字句繁麗、而語則似懂非懂、以迷惑人、屬於神秘派之類。其中之句如「容眸流盼」的容是指顏面、顏面如何能流盼呢、不是不通就是多餘的字了。大約古人作文之法有秘訣。一爲省去「之乎者也」等字、一爲換成難解之字、也就是以似懂非懂的字句來迷惑人。又多用贅語、如「眞美人也」、「眞靈人也」、靈與美究有何分別。用了許多不可測之字和語、如罵人曰牛曰馬、人易了解其罵我爲牛爲馬、因明白易懂。如果換了猶嗑來罵人、則比較難于認識、至多體會爲加犬傍則大抵以獸類罵我、但口傍的嗑字、則究竟指的甚麼東西呢。恐怕連字典也沒有這箇字、無從索解、使被罵的人、也覺得因不懂而心中不安。古文難測、其弊多在此。神秘派之秘也在此。

又古時席地而坐、西王母如何坐。武帝跪拜又是甚麼樣的。現在恐怕很多人不大了解了、魯迅深通字體變遷的歷史、他用很簡單的方法寫出來、就讓人一目了然了。如跪 \parallel ㄨㄥ、拜 \parallel ㄨㄥ、坐 \parallel ㄨㄥ、這就是古代人日常席地坐起的方式。

10 所引『漢武帝內傳』

三一〇

寫印本『大略』四は引文末に「太平廣記卷三所引」と注記し、『史略』の「帝跪謝」以下の部分を引かず、後掲の「王母自設天廚」以下を續ける。鉛印本では注記は消えており、引用は現行の『史略』のごとく改められている。引用を改めた部分についても種々不明な點はあるものの、寫印本と同じく『太平廣記』に據ったものと思われる。しかも、引用文の字句から所據の『廣記』は黃晟校刊本と推測される。引用文末句の「以身佩之焉」の「佩」字は、『漢武帝內傳』各本はもとより、『廣記』各本の中でも黃晟校刊本、掃葉書局本、小説大觀本以外は、「模」ないし「莫」（模

の誤りであろう)に作る。「佩」に作る三本の中で、時期的に魯迅の引用は黄刻本以外に考えられない。寫印本引用の後半は次の一段である。

王母自設天厨、珍妙非常、豐珍上果、芳華百味、紫芝羹羹、芬芳填櫛、清香之酒、非地上所有、香氣殊絶、帝不能名也。……酒觴數遍、王母乃命諸侍女王子登彈八琅之璈、又命侍女董雙成吹雲和之笙、石公子擊昆庭之金、許飛瓊鼓震靈之簧、婉凌華拊五靈之石、茫成君擊湘陰之磬、段安香作九天之鈞。於是衆聲激朗、靈首駭空。又命法嬰歌玄靈之曲。「珍妙」の「珍」字、「廣記」は「眞」に作る。同音。

この一段を現行のものに引用しなおしたのは前條で述べたように「釋家言」の引證とすためであった。なお鹽谷滄『支那文學概論講話』第六章は、魯迅引用部分を含めて「到七月七日」より「玄靈曲」までを引く。

「咸住殿下」の「殿」字、『大略』寫印本、鉛印本、『史略』初版より三十年集版に至るまでみな「階」字に作る。五七年版はじめて「殿」に作る。但し『大略』單、榮兩校本はともに「殿」字に改む。これは『太平廣記』各本、『漢武帝内傳』各本いずれも「殿」字に作り。魯迅引用部分直前に「立於階下」という句があるので、それにひかれた筆誤とみてよいだろう。

「王母唯扶二侍女上殿」の「扶」字、『廣記』談愷刻本、中華書局本等「挾」に作るが黄刻本は「扶」に作る。

「容眸流盼」の「盼」字、『大略』寫印、鉛印兩本、初版から七版に至るまで「盼」字に作り、訂正版で「盼」となる。『廣記』各本はみな「盼」に作り、「盼」に作るのは龍威秘書本なので、あるいは訂正版における誤植かもしれない。なお守山閣叢書本は「眄」に作り、錢熙祚の校は盼を誤りとする。

「帝跪謝」、各本「帝下席跪謝」に作る。

「言甚急切」、「大略」鉛印本より三十年集版に至るまで「切急」と顛倒する。各本みな「急切」に作る。「畏于意志」、「廣記」各本「志意」に作る。

「但當問篤志何如」、各本「但當問篤向之志必卒何如」に作る。魯迅引用のように作ったテキストは未見。「可不勦勉」、「大略」鉛印本より三十年集版に至るまで「勉勦」と顛倒する。

この引用一段、特に文字の異同が多い。

II 又有『漢武洞冥記』四卷、以至『洞冥記』今全、文如下

三一〇

寫印本『大略』四云、又有漢武洞冥記四卷、題後漢郭憲撰。全書六十則、皆言神仙道術及遠方珍異之事。（引用一則是『史略』に同じい。末に「其所以名『洞冥記』者、序云」として序の一部を引く、今略。）此書稱郭憲作、始于宋人目錄、舊唐書亦然、則所據之古今書錄亦如此。然隋志但云郭氏、無名。六朝人虛造神仙家書、每好稱郭氏、殆以影射郭璞、故有郭氏洞冥記、有郭氏支中記。支中記今佚。審其遺文、亦與神異經相類。鉛印本は文末「文如下」を缺く以外、すべて『史略』に同じい。

「小説的變遷」第一講云、『洞冥記』是說神仙道術及遠方怪異的事情。

又云、至于『洞冥記』、『西京雜記』又已經爲人考出是六朝人做的。

『漢武帝別國洞冥記』序云、憲家世述道書、推求先聖往賢之所撰集、不可窮盡、千室不能藏、萬乘不能載、猶有漏逸。或言浮誕非政教所同經文。史官記事略而不取。蓋偏國殊方、並不在錄。愚謂古曩餘事、不可得而棄。況漢武帝明俊特異之主、東方朔因滑稽浮誕以匡諫、洞心於道教、使冥迹之奧、昭然顯著。今籍舊史之所不載者、聊以聞見、撰洞冥記四卷、成一家之書、庶明博君子諒而異焉。武帝以欲窮神仙之事、故絕域遐方貢其珍異奇物、及道術之人、故於漢世盛於群主也。故編次之云爾。顧氏文房小說本

『少室山房筆叢』卷三、四部正論下云、洞冥記四卷、題郭憲子橫、亦恐贗也。憲事世祖、以直諫聞、忍拙飾漢武東方事、以導後世人君之欲。且子橫生西京末、其文字未應遽爾。蓋六朝假託、若漢武故事之類耳。後漢書憲列方技類、後人蓋緣是託之。

『四庫提要』卷一四二、小說家類云、舊本題後漢郭憲撰。憲字子橫、汝南宋人。官至光祿勳。事蹟具後漢書方術傳。是書隋志止一卷。唐志始作四卷。文獻通考有拾遺一卷。晁公武讀書志引憲自序謂、漢武明雋特異之主、東方朔因滑稽浮誕以匡諫、洞心於道教、使冥迹之奧、昭然顯著、故曰洞冥。陳振孫書錄解題云、其別錄又於御覽中鈔出、則四卷亦非全書。別錄當即拾遺也。今憲序與拾遺俱已佚、惟存此四卷、核以諸書所引、皆相符合。蓋猶舊本。考范史載憲初以不臣王莽、至焚其所賜之衣、逃匿海濱。後以直諫忤光武帝、有關東航郭子橫之語、蓋亦剛正忠直之士。徒以撰酒救火一事、遂抑之方術之中、其事之有無、已不可定。至於此書所載、皆怪誕不根之談、未必眞出憲手。又詞句綺艷、亦迥異東京。或六朝人依託爲之。(後略)

鹽谷澠『支那文學概論講話』第六章云、別國洞冥記四卷(中略)本書は四卷に分つてありますが、實は六十則の零開瑣語を録したるものであります。首に郭憲の自序があり、その中に漢武帝明俊特異之主、東方朔因滑稽浮誕、以匡諫、洞心於道教、使冥迹之奧、昭然顯著の語あるによつて名となすといふのであります。極めて拙劣な文章で、後人傳會の跡歴然であります。本書は全く十洲記等を學んだもので、武帝と東方朔とに關する怪誕なる話が多く載せてあります。故に又漢武洞冥記とも申します。次に洞冥草の條を引く。從略。郭憲字は子橫、剛正忠直の士であります。王莽の招に應じなかつたので王莽は之を殺さうとしました。憲は因て海濱に逃げ匿れ、後光武帝に仕へ、直諫を以てその旨に忤ひ、時に關東航々郭子橫の語がありました。後道家に入りましたので、後漢書方術傳に載せられてあります。その酒を撰シいて火を救ふことなどは固よりあてにならない話であります。本書は固より憲の自作ではありません。

ぬ。文章豔綉にしてやはり六朝人の手に成つたものでありませう。蓋し詞句の妍華なるを以て亦後世文人の採撫する所となりました。

魯迅引く所の『洞冥記』序中「洞心于道教、使冥迹之奥」の「洞」「冥」には初版より七版に至るまで鹽谷所引と同じく圈點が附いている。訂正版以降はずされている。

『後漢書』卷八二上、方術列傳云、郭憲字子橫、汝南宋人也。○少師事東海王仲子。時王莽爲大司馬、召仲子、仲子欲往。憲諫曰、「禮有來學、無有往教之義。○今君賤道畏貴、竊所不取。」仲子曰、「王公至重、不敢違之。」憲曰、「今正臨講業、且當訖事。」仲子從之、日晏乃往。莽問、「君來何遲。」仲子具以憲言對、莽陰奇之。及後篡位、拜憲郎中、賜以衣服。憲受衣焚之、逃于東海之濱。莽深忿恚、討逐不知所在。

〔一〕續漢志汝南郡有宋公國、周名鄆丘、漢改爲新鄆、章帝建初四年、徙宋公於此。〔二〕禮記曰、「禮聞來學、不聞往教。」

光武卽位、求天下有道之人、乃徵憲拜博士。再遷、建武七年、代張堪爲光祿勳。從駕南郊。憲在位、忽回向東北、含酒三澣。○執法奏爲不敬。○詔問其故。憲對曰、「齊國失火、故以此厭之。」後齊果上火災、與郊同日。

〔一〕埤蒼曰：澣、噴也。音巽。〔二〕執法、軋劾之官也。

八年、車駕西征隗囂、憲諫曰、「天下初定、車駕未可以動。」憲乃當車拔佩刀以斷車軻。○帝不從、遂上隴。其後潁川兵起、乃回駕而還。帝歎曰、「恨不用子橫之言。」

〔一〕鞞在馬背、音胤。

時匈奴數犯塞、帝患之、乃召百僚廷議。憲以爲天下疲敝、不宜動衆。諫爭不合、乃伏地稱眩瞢、不復言。○帝令兩郎扶下殿、憲亦不拜。帝曰、「常聞『關東觥觥郭子橫』、竟不虛也。」○憲遂以病辭退、卒於家。

〔一〕贅、亂也。〔二〕觥觥、剛直之貌、音古橫反。

12 然『洞冥記』稱憲作、以至有『郭氏洞冥記』

『隋志』史部雜傳類云、漢武洞冥記一卷郭氏撰。

『舊唐志』史部雜傳類云、漢別國洞冥記四卷郭憲撰。

『新唐志』子部神仙家類云、郭憲漢武帝別國洞冥記四卷。

ただし『初學記』は引用のうち二十一箇所で『郭子横(別國)洞冥記』とし、『史通』は次のように言う。

『史通』卷一〇、雜述篇云、逸事(中略)如郭子横之洞冥、王子年之拾遺、全構虛辭、用警愚俗。此其爲弊之甚者也。

『史通』は中宗、『初學記』は玄宗時代の作であるから、盛唐には郭憲に附會する説が定着しはじめていたのだらう。なお寛平年間(八九一八九七)の『日本國見在書目』にも「雜傳家」類に「漢武洞冥記四卷郭子横撰」と著録する。

『郭氏玄中記』は『初學記』の引用の中にも多く見え、『太平御覽』經史圖書綱目、また『太平廣記』引用書目にもそのように見えるが、『郭氏洞冥記』の方は未見である。『隋志』の「郭氏撰」からそう呼んだのであろう。『玄中記』の遺文は『古小説鈎沈』に七十一事を所收、荊泮林輯本よりも七事多い。他に『玉函山房輯佚書』本(計五十七事)等がある。

13 所引『洞冥記』

三七十三

程校漢魏叢書、龍威秘書、子書百家、百子全書各本に一致する。「帝令銚此草爲泥」の「銚」字、寫印本から五七年版に至るまですべて「剗」字に作る。各本また「剗」に作る。同音字であるが「剗」とすべきであろう。

14 至于雜載人間瑣事者、以至文筆可覽者也

三七一九

寫印本『大略』四云、至於雜載人間瑣事者、有西京雜記、本二卷、今六卷者宋人所分析也。末有葛洪跋言、其家有劉歆漢書一百卷、考校班固所作、殆是全取劉氏、小有異同、固所不取、不過二萬許言。今鈔出爲二卷、以補漢書之闕。然隋志尙不著撰人、至舊唐書始云葛洪撰、則此跋或是唐時增益。書之所記、如黃省曾序言、「大約有四、則猥瑣可略、閑漫無歸、與夫杳昧而難憑、觸忌而須諱者。」然文筆可觀。段成式西陽雜俎語資篇云、「屢信作詩、用西京雜記事、旋自追改曰、此與均語、恐不足用」。雖無顯證、終爲近似矣。鉛印本是「史略」にほとんど同じく、「唐志」を「劉昫唐書」とし、「若論文學」を「若以小說論」とするのが違うのみである。なお「西陽雜俎」の語について、鉛印本では解釋が變つたために撰者についての判断も變つたことが分る。

「小説的變遷」第一講云、此外還有郭憲做的『洞冥記』、劉歆做的『西京雜記』。又云、「西京雜記」則雜記人間瑣事。又云、至于『洞冥記』、『西京雜記』又已經爲人考出是六朝人做的。

『郡齋讀書志』卷二上、雜史類云、西京雜記二卷、右晉葛洪撰。初序言、洪家有劉子駿漢書百卷、乃當時欲撰史、錄事而未得締思、無前後之次、雜記而已。後學者始甲乙壬癸爲十卷。以其書校班史、殆全取劉書耳、所餘二萬許言、乃抄撮之、析二篇、以裨漢書之闕、猶存甲乙之次。江左人或以爲吳均依託爲之。

『直齋書錄解題』卷七、傳記類云、西京雜記六卷、晉勾漏令丹陽葛洪稚川撰。其卷末言、洪家有劉子駿書百卷、先父傳之。歆欲撰漢書、雜錄漢事、未及而亡。試以此記攷校班固所作、殆是全取劉書、少有異同耳。固所不取不過二萬餘言。今鈔出爲二卷、以裨漢書之闕。所謂先父者、歆之於向也、而館閣書目以爲洪父傳之非是。唐藝文志亦只二卷、今六卷者後人分之也。按洪博聞深學、江左絕倫、所著書幾五百卷、本傳具載其目、不聞有此書、而向歆父子亦不聞其嘗作史傳於世、使班固有所因述、亦不應全沒不著也。殆有可疑者、豈惟向歆所傳、亦未必洪之作也。按吳公武讀書志云、此

書江左人皆以爲吳均依託爲之。

『四庫提要』卷一四〇、小說家類云、西京雜記六卷 舊本題晉葛洪撰。洪有肘後備急方、已著錄。黃伯思東觀餘論稱、此書中事、皆劉歆所說、葛稚川採之。其稱余者皆歆本文云云。今檢書後有洪跋稱、其家有劉歆漢書一百卷、考校班固所作、殆是全取劉氏、有小異同。固所不取、不過二萬許言。今鈔出爲二卷、名曰西京雜記。以補漢書之闕云云。伯思所說、蓋據其文。案隋書經籍志載此書二卷、不著撰人名氏。漢書匡衡傳顏師古注稱、今有西京雜記者、出於里巷、亦不言作者爲何人。至段成式酉陽雜俎廣動植篇、始載葛稚川就上林令魚泉唐草木名、今在此書第一卷中。張彥遠歷代名畫記、載毛延壽畫王昭君事、亦引爲葛洪西京雜記。則指爲葛洪者、實起於唐。故舊唐書經籍志載此書、遂註曰晉葛洪撰。然酉陽雜俎語資篇、別載庾信作詩、用西京雜記事、旋自追改曰、此吳均語、恐不足用。晁公武讀書志亦稱、江左人或以爲吳均依託。蓋卽據成式所載庾信語也。今考晉書葛洪傳載洪所著、有抱朴子、神仙良吏集異等傳、金匱要方、肘後備急方、並諸雜文、共五百餘卷。並無西京雜記之名、則作洪撰者、自屬舛誤。(略)是以陳振孫等皆深以爲疑、然庾信指爲吳均、別無他證。段或式所述信語、亦未見於他書。流傳既久未可遽更、今姑從原跋、兼題劉歆葛洪姓名、以存其舊。其書諸志皆作二卷、今作六卷。據書錄解題、蓋宋人所分、今亦仍之。(後略)

『四庫全書簡明目錄』卷一四、小說家類云、西京雜記六卷、舊本或題漢劉歆撰、或題晉葛洪撰、實則梁吳均撰。託言葛洪得劉歆漢書遺藁、錄班固所不載者爲此書也。

『西京雜記』跋云、洪家世有劉子駿漢書一百卷、無首尾題目、但以甲乙丙丁紀其卷數、先父傳之。歆欲撰漢書、編錄漢事、未得締構而亡、故書無宗本、止雜記而已。失前後之次、無事類之辨。後好事者以意次第之、始甲終癸爲十秩、秩十卷、合爲百卷。洪家具有其書、試以此記考校班固所作、殆是全取劉書、有小異同耳。并固所不取、不過二萬許

言。今抄出爲二卷、名曰西京雜記、以裨漢書之闕。爾後洪家遭火、書籍都盡。此兩卷在洪巾箱中、常以自隨、故得猶在。劉歆所記、世人希有、縱復有者、多不備足、見其首尾參錯、前後倒亂、亦不知何書、罕能全錄。恐年代稍久、歆所撰遂沒、并洪家此書二卷、不知出所、故序之云爾。

洪家復有漢武帝禁中起居注一卷、漢武故事二卷、世人希有之者、今并五卷爲一秩、庶免淪沒焉。四部叢刊本

『隋志』舊事類云、西京雜記二卷。

『舊唐志』故事類云、西京雜記一卷葛洪撰。又地理類重出云、西京雜記一卷葛洪撰。

『新唐志』故事類云、葛洪西京雜記二卷。又地理類重出云、葛洪西京雜記二卷。

『西陽雜俎』卷一二、語資篇云、歷城縣魏明寺中有韓公碑、太和中所造也。魏公會令人遍錄州界石碑、言此碑詞義最善。常藏一本於枕中、故家人名此枕爲麒麟函。韓公諱麒麟。庾信作詩、用西京雜記事、旋自追改曰、此吳均語、恐不足用也。魏肇師曰、古人託曲者多矣。然鸚鵡賦、禰衡潘尼二集並載。奕賦、曹植左思之言正同。古人用意、何至於此。君房曰、詞人自是好相採取、一字不異、良是後人莫辨。魏尉瑾曰、九錫或稱王粲、六代亦言曹植。信曰、我江南才士、今日亦無。舉世所推、如溫子升、獨擅鄴下、嘗見其詞筆、亦足稱是遠名。近得魏收數卷碑、製作富逸、特是高才也。此一節は全体として文章の出來榮えについて述べたものであろうが、「韓公諱麒麟」で話が切れるという説があり、分節が問題になる所である。しかし、庾信の言葉の次の「魏肇師曰」から「六代亦言曹植」までは、古人の文章が傳寫流行の過程でほんとうの作者が紛れて分らなくなることと言ったものと讀め、肇師の言が庾信の言を承けて發されたものとするならば、後續の言葉から類推して、庾信が『西京雜記』を吳均の作と思つていたと讀めないことはない。或説は『西陽雜俎』のこの節をたぶんそう讀んだところから出たものであろう。魯迅も寫印本の時點ではそう理

解したもののようである。しかし『西京雜記』を引く梁初の『殷芸小説』が「鈔撮故書」したものであることから、かれは吳均説を否定し、『西陽』の言葉を『西京雜記』に出ることがらについて詩を作ったのだが、その詩の一部の文句がたまたまたいそう近い時代の、それも吳均體と稱せられる吳均の使った文句と同じであったので、それを使うのを止めた」と解釋しなおしたのである。なお吳均は宋泰始五年（西紀四九〇）生、梁普通元年（五三〇）卒。庾信は梁天監十二年（五三三）生、隋開皇元年（五八一）卒である。殷芸は宋元徽元年（四七三）生、梁中大通三年（五三三）卒で、吳均とはほぼ同時代、『小説』の成立は、殷芸が安右長史になった天監十三年（五三三）ごろだと考えられている。そのころ吳均はまだ在世中であつた。

殷芸撰『小説』については、『隋志』小説家類に「小説十卷梁武帝勅安右長史殷芸撰。梁目三十卷」とある。『古小説鈎沈』に計一三五條を輯め、そのうち『西京雜記』を引くもの十一條である。なお余嘉錫「殷芸小説輯證」（二六三）『余嘉錫論學雜著』上冊）、近刊『殷芸小説』（周楞伽輯注、一九四〇、中國古典小說研究資料叢書）も各々十一條を引く。

「或又以文中稱劉向爲家君、因疑葛洪作」とは盧文弨を指す。

盧文弨抱經堂新雕『西京雜記』緣起云、（前略）今此書或以爲晉葛洪著、或以爲梁吳均僞撰、而何梓爲。余則以此漢人所記無疑也。說苑新序、其書皆在劉向前、向校而傳之、後人因名二書爲劉向著。今此書之果出於歆、別無可考、卽當以葛洪之言爲據。洪非不能自著書者、何必假名於歆。書中稱、成帝好蹴鞠、羣臣以爲非至尊所宜、家君作彈棋以獻。此歆謂向家君也。洪奈何以一書之故、至不憚父人之父、求以取信於世也邪。若吳均者、亦通人。其著書甚多、皆見於梁書本傳。知其亦必不屑託名於劉歆、且其文卽後拔有古氣、要未可與漢西京埒、則其不出於均又明甚。隋書經籍志載此書於舊事篇、不著姓名、新舊唐書始題葛洪、且入之地理類、似全未寓目也。夫冠以葛洪、以洪鈔而傳之、猶

說苑新序之稱劉向、固亦無害。其文則非洪所自撰。凡虛文可以偽爲、實事難以空造、如梁王之集遊事爲賦、廣川王之發冢藏所得、豈皆虛邪。至陳振孫疑向歆父子不聞作史、此又不然。歷朝撰造、哀然成編、所云百卷、特前史官之舊、向傳之歆、歆欲編錄而未成、其見於洪之序者如此、本不謂其父子皆嘗作史也。洪以爲本之劉歆、則吾亦從而劉歆之耳。又何疑焉。（後略）

黃省曾『西京雜記』序云、漢之西京、惟固書爲該練、非固之能爾、亦其所資者繙也。仲尼約之寶書、馬遷鳩諸國史、因本而成、在古皆然也。暇得葛洪氏西京雜記讀之、云爲劉子駿所撰、以甲乙第次百卷。考比固作、殆是全劉書、有小異同耳。洪又抄集固所不著錄二萬許言、命曰西京雜記。予於是始知固之漢書、蓋根起於子駿也。乃遡憶其所不錄之故、大約有四、則猥瑣可略、閑漫無歸、與夫杳昧而難憑、觸忌而須諱者也。其猥瑣者、則霍妻遺行之類是也。其閑漫者、則上林異植之類是也。其杳昧者、則宣獄佩鏡、秦庫玉燈之類是也。而其觸忌者、則慶郎趙后之類是也。凡若此者、披金置沙、法所刪棄矣。至於乘輿大駕、儀在典章、鮑董問對、言關理奧、亦皆擯落而無採、宜書而不書者何也。豈不幸存於雜記歟。但今所傳且失其半、又非洪之故簡矣。嗚呼、後之代儒、安得如子駿者。遐收彙集、以待班固者出歟。誠爲史家之一概也。漢魏叢書本

許廣平『魯迅回憶錄』三、魯迅的講演與講課云、雜載人間瑣事的『西京雜記』、是與歷史有關而正史沒有記載的、如呂后之殺趙王事（如卷一）、有似考據語、令閱者恍以爲真、實作者故作神妙的（如卷三）、又齊人彈琴而能作單鵠寡鳧之弄、武帝以象牙爲簾、都在有無不可知之列、是足以令人疑信參半、是作古小說的人寫下「空中樓閣」的妙手秘訣。

照這樣講解了字句、當時文章流派、內容的荒誕與否、可信程度如何？都在書本之外、逐一指出、使人不會因讀書而迷信古人、是很重要的。

寫印本『大略』は、「史遷發憤作史記」「廣川王去疾發樂書家」の二條は引かず、次の二條を引く。

尉陀獻高祖鮫魚荔枝、高祖報以蒲桃錦四匹。

枚臯文章敏疾、長卿制作淹遲、皆盡一時之譽。而長卿首尾溫麗、枚臯時有累句、故知疾行無善迹矣。楊子雲曰、軍旅之際、戎馬之間、飛書馳檄、用枚臯。郎廟之下、朝廷之中、高文典冊、用相如。「郎」字、各本「廊」に作る。右二條いずれも卷三所收。

鉛印本は『史略』の四條より三條多く引く。

惠帝嘗與趙王同寢處、呂后欲殺之而未得。後帝早獵、王不能夙興、呂后命力士于被中縊殺之。及死、呂后不之信、以綠囊盛之、載以小駢車入見、乃厚賜力士。力士是東郭門外官奴。帝後知、腰斬之、后不知也。(卷一)

齊人劉道疆善彈琴、能作單鶴寡亮之弄、聽者皆悲不能自攝。(卷五)

武帝以象牙爲簾、賜李夫人。(同上)

「居貧憂、適」の「憂」字、『西京雜記』各本および寫印本は「愁」に作る。鉛印本で「憂」に作り、以後各版それを襲うが、誤植の可能性が濃い。「我生、平富足」、『西京雜記』各本、『大略』寫印、鉛印兩本、また初版はみな「平生」に作る。二版よりみな顛倒するが、これは改めるべきだろう。「肌膚柔滑如脂」の下、『大略』鉛印本より以下『史略』各版「十七而寡」の一句を脱す。「子雲曰」の上に寫印本は「楊」字を附すが、衍。「左右擊之」の「左右」の下、各本「遂」または「逐」字を挿む。增訂漢魏叢書本のみ「左右擊之」と『大略』鉛印本、『史略』に同じく作る。しかし「郎廟」「駢車」は「廊廟」「駢車」に作るので、魯迅の據ったものとはにわかには決めがたい。

「家君以爲「外戚傳」稱史佚教其子以爾雅」については魯迅の解説がある。

『師弟答問集』一一〇頁云、「増田問曰」小説史略原著五十三頁、三行（譯本デハ七十頁十四行）外戚傳ニ注シテ史記ト書キマシタガ、一友人ガ書ヲ寄セテ云リ（史記デハ外戚ハ「世家」ニ入ッテ居リ、「外戚世家」ヲ檢スルニ、ソナ文ハ見當リマセン、班固ノ漢書ニ外戚傳アリ、然シソレニモユノ文ハナシ、ユノノ所謂「外戚傳」ハ劉歆ノ「漢書」ナルモノヲ指スノデハナイカ。」

小生モ所謂「劉歆ノ漢書」ヲ指スノカトモ思ヒマスガ、如何デセウ。

〔魯迅答曰〕原書ニハ注ナシ、譯本ニ（史記）ト注シテ居ル、ソノ外戚傳ヲ史記ト推測スル外、仕様ナシ。古人ノ著作中ニ往々ソノ書名ヲ書キチガヒアリ、外戚世家ヲ外戚傳トカイテ仕舞フモ、不思議ナクナシ。今ノ史記ハモウ、漢、晉人ノ見タ所ノ完全ナ史記デハナイ。多ク脱簡ガアル、ソレハ今デハ逸失シタモノデシヤウ。兎角、小説デスカラコウ云フ風ニ推測スル外、仕様ナシ。併シ劉歆ノ漢書デハ決シテナイ。西京雜記ハ劉歆ノ作ダト云フノデ、此ノ一條ハ「家君」（歆ノ父向）ノ言葉ヲ記シテ居ルノデスカラ子ノ著作ヲ引用スル筈ナイ。班固ハ劉歆ヨリモオソイカラ無論ソノ漢書デナイ。

「又記言「孔子教魯哀公學『爾雅』」の「記」とは即ち孔子三朝記のこと、いま『大戴禮記』に入る。

『大戴禮記』小辨第七四云、「魯哀」公曰、寡人欲學小辨、以觀於政、其可乎。子曰、否、不可。社稷之主愛日、日不可得、學不可以辨、是故昔者先王學齊大道、以觀於政。天子學樂辨風、制禮以行政。諸侯學禮辨官政、以行事、以尊事天子。大夫學德別義、矜行以事君。士學順辨言以遂志。庶人聽長辨禁、農以行力。如此猶恐不濟、奈何其小辨乎。公曰、不辨則何以爲政。子曰、辨而不小。夫小辨破言、小言破義、小義破道、道小不通、通道必簡。是故循弦以觀於

樂、足以辨風矣。爾雅以觀於古、足以辨言矣。傳言以象、反舌皆至、可謂簡矣。夫道不簡則不行、不行則不樂、夫亦固十稜之變、由不可既也。而況天下之言乎。

増田涉譯本『支那小説史』の注に、「記。『禮記』をいふ。」というのは必ずしも誤つてはいない。

16 葛洪字稚川、以至其言亦不足據

三九十四

寫印本『大略』は葛洪の引く『異聞記』についての次の記述を『漢武洞冥記』の後に續ける。

葛洪抱朴子内篇三云、

故太丘長潁川陳仲弓、篤論士也。撰異聞記云、郡人張廣定者、遭亂避地。有女年四歲、不能步涉、……邨口有古大家、先有穿穴、以器盛縑之、下此女於冢中、以數月許乾飯及水漿與之、而捨去、候世平定。其間三年、廣定得還鄉里……往視女故坐冢中、見其父母猶識之喜甚、而父母初疑其鬼也。入就之乃知不死、問從何得食。女言、糧初盡時甚飢、見冢角有一物伸頸吞氣、試效之、轉不復飢、日月爲之、以至於今。……廣定索女所言物、乃是一大龜耳。奴出食穀、初小腹痛嘔逆、久許乃習。

陳實未聞撰異文記、此一則又甚似方士常談、疑亦假託。葛洪雖去漢未遠、而溺于神仙、故其言亦不足據。この後「至于雜載人間瑣事者」に續く。

鉛印本の記述は、『史略』と同じ位置にある。ただ「葛洪字稚川」から「可六百卷」までがなく、「其『抱朴子』（内篇三）言」を「葛洪又言」に作り、「然陳實此記、史志既所不載」の前に「（詳見抱朴子内篇三）」と補ひ、「此書既未見他書稱引」に作るほかは、『史略』に同じい。

『晉書』卷七十二、葛洪傳云、葛洪字稚川、丹楊句容人也。祖系、吳大鴻臚。父悌、吳平後入晉、爲邵陵太守。洪少好

學、家貧、躬自伐薪以質紙筆、夜輒寫書誦習、遂以儒學知名。性寡欲、無所愛翫、不知某局幾道、擲蒲齒名。爲人木訥、不好榮利、閉門却掃、未嘗交游。於餘杭山見何幼道、郭文學、目擊而已、各無所言。時或尋書問義、不遠數千里崎嶇冒涉、期於必得、遂究覽典籍、尤好神仙導養之法。從祖玄、吳時學道得仙、號曰葛仙公、以其鍊丹祕術授弟子鄭隱。洪就隱學、悉得其法焉。後師事南海太守上黨鮑玄。玄亦內學、逆占將來、見洪深重之、以女妻洪。洪傳玄業、兼綜練醫術、凡所著撰、皆精覈是非、而才章富瞻。

太安中、石冰作亂、吳興太守顧祕爲義軍都督、與周玘等起兵討之、祕徵洪爲將兵都尉、攻冰別率、破之、遷伏波將軍。冰平、洪不論功賞、徑至洛陽、欲搜求異書以廣其學。

洪見天下已亂、欲避地南土、乃參廣州刺史粘含軍事。及含遇害、遂停南土多年、征鎮檄命一無所就。後遷鄉里、禮辟皆不赴。元帝爲丞相、辟爲掾。以平賊功、賜爵關內侯。咸和初、司徒導召補州主簿、轉司徒掾、遷諮議參軍。干寶深相親友、薦洪才堪國史、選爲散騎常侍、領大著作、洪固辭不就。以年老、欲鍊丹以祈遐壽、聞交阯出丹、求爲句扁令。帝以洪資高、不許。洪曰、「非欲爲榮、以有丹耳。」帝從之。洪遂將子姪俱行。至廣州、刺史鄧嶽留不聽去、洪乃止羅浮山煉丹。嶽表補東官太守、又辭不就。嶽乃以洪兄子望爲記室參軍。在山積年、優游閑養、著述不輟。其自序曰、

洪體乏進趣之才、偶好無爲之業。假令奮翅則能陵厲玄霄、騁足則能追風躡景、猶欲戢勁翮於鷓鴣之羣、藏逸迹於跛驢之伍、豈況大塊稟我以尋常之短羽、造化假我以至驚之蹇足。自卜者審、不能者止、又豈敢力蒼蠅而慕沖天之舉、策跛躄而追飛兔之軌、飾嫗母之篤陋、求媒陽之美談、推沙礫之賤質、索千金於和肆哉。夫焦僮之步而企及夸父之蹤、近才所以躓礙也、要離之羸而強赴扛鼎之勢、秦人所以斷筋也。是以望絕於榮華之途、而志安乎窮圯之域、藜

藿有八珍之甘、蓬華有藻稅之樂也。故權貴之家、雖咫尺弗從也、知道之士、雖艱遠必造也。考覽奇書、既不少矣、率多隱語、難可卒解、自非至精不能尋究、自非篤勤不能悉見也。

道士弘博洽聞者寡、而意斷妄說者衆。至於時有好事者、欲有所修爲、倉卒不知所從、而意之所疑又無足證。今爲此書、粗學長生之理。其至妙者不得宣之於翰墨、蓋粗言較略以示一隅、冀悻憤之徒省之可以思過半矣。豈謂闔塞必能窮暢遠乎、聊論其所先覺者耳。世儒徒知服膺周孔、莫信神仙之書、不但大而笑之、又將謗毀真正。故予所著子言黃白之事、名曰內篇、其餘駁難通釋、名曰外篇、大凡內外一百一十六篇。雖不足藏諸名山、且欲緘之金匱、以示識者。自號抱朴子、因以名書。其餘所著碑誄詩賦百卷、移檄章表三十卷、神仙、良吏、隱逸、集異等傳各十卷、又抄五經、史、漢、百家之言、方技雜事三百一十卷、金匱藥方一百卷、肘後要急方四卷。

洪博聞深洽、江左絕倫。著述篇章富於班馬、又精辯玄曠、析理入微。後忽與嶽疏云、「當遠行尋師、剋期便發。」嶽得疏、狼狽往別。而洪坐至日中、兀然若睡而卒、嶽至、遂不及見。時年八十一。視其顏色如生、體亦柔軟、舉尸入棺、甚輕如空衣、世以爲尸解得仙云。稚川束髮從師、老而忘倦。紉奇冊府、總百代之遺編、紀化仙都、窮九丹之祕術。謝浮榮而捐雜藝、賤尺寶而貴分陰、游德棲真、超然事外。全生之道、其最優乎。

贊曰、景純通秀、夙振宏材。沈研鳥冊、洞曉龜枝。匪寧國難、坐致身災。稚川優洽、貧而樂道。載範斯文、永傳洪藻。

『入室山房筆叢』卷三一、四部正誦中云、抱朴子內外篇四十卷、晉葛洪稚川撰。洪以博洽名江左。身所著書、殆六百餘卷。自漢以來。稱撰述亡盛於洪。蓋篤志負才、而游方之外者也。黃東發詆洪不應以神仙誤天下後世、持論甚公。而以此書爲僞則失考。洪本傳明言抱朴諸篇、歷唐宋以遺、本有疑其僞者。今讀其言、比物聯類、紆徐鬱茂、滑稽不窮。其外篇

蓋擬王氏論衡、故旁引曲喻、必達其詞。雖時失繳冗、非淺見狹識所窺也。且洪既爲神仙之學、其異於吾儒、勢固應爾。又曷僞焉。

魯迅は葛洪の著書を「可六百卷」とするが、『晉書』本傳によれば計七百卷、『諸書抄』を除けば、三百九十卷となつて、合わない。陳振孫は五百卷とする。魯迅は胡應麟に據つたのであろう。

『少室山房筆叢』卷三六、二酉綴遺中云、陳太丘絶不聞著書、而意林所引抱朴子、載陳仲弓異聞記云、同郡人張廣遭亂。有女四歲不能行、棄冢中。後開冢、女復活。問之、曰見冢角有一物、伸頸吞氣、乃效之、轉不復飢。尋看乃大龜也。將女還食、食飲初、小腹痛、久乃習之。按此書太平廣記及御覽俱不載、蓋其亡已久。(後略)

『古小說鈎沈』に輯本があり、『抱朴子』所引の一條と『北戸錄』所引の一條とを收めるが、魯迅がそれについてどう考えたかは分らない。なお『鈎沈』本と寫印本所引とは字句の出入がある。

「丹陽」は『晉書』本傳に従つて初版から三十年集版までみな「丹楊」に作るが、五七年版で現行の地名「丹陽」に改められた。「交址」も初版より五七年版に至るまで「交阯」に作る。「陳實」は初版のみ「陳寔」に作る。末句初版のみ「亦不足據矣」と「矣」字を附ける。

17 又有『飛燕外傳』一卷、以至唐宋人所爲

寫印本『大略』四云、又有飛燕外傳一卷、記飛燕姊妹故事、題漢伶元撰、似唐人所爲。

鉛印本『大略』三云、又有飛燕外傳一卷、記趙飛燕姊妹故事、題漢伶元撰。司馬光作通鑑、嘗取其「禍水滅火」語、殆以爲眞漢人作、然恐是唐宋人所爲。

『趙飛燕外傳』云、「合德」音詞舒閑清切、左右嗟賞之嘖嘖、帝乃歸合德。宣帝時披香博士淳方成、白髮教授宮中、

號渾夫人、在帝后唾曰、此禍水也、滅火必矣。顧氏文房小說本

『資治通鑑』卷三二云、成帝鴻嘉三年（略）其後上微行過陽阿王家、悅歌舞者趙飛燕、召入宮、大幸。有女弟、復召入、姿性尤醜粹、左右見之、皆嘖嘖嗟賞。有宣帝時披香博士淳方成在帝後、唾曰、此禍水也、滅火必矣。姉弟俱爲健仔、貴傾後宮。（略）

『直齋書錄解題』卷七、傳記類云、飛燕外傳一卷、稱漢河東都尉伶玄子于撰。自言與楊雄同時、而史無所見。或云僞書也。然通德擁髻等事、文士多用之、而禍水滅火一語、司馬公載之通鑑矣。

『少室山房筆叢』卷三二、四部正譌下云、趙飛燕外傳、稱河東都尉伶玄撰。宋人或謂爲僞書、以史無所見也。然文體頗渾朴、不類六朝。禍水滅火事、司馬公載之通鑑誠怪。如以詩文士引用爲疑、則非懸解語也。文本傳自言見詛史氏、當是後人所加。

『四庫提要』卷一四三、小說家類存目云、飛燕外傳一卷、舊本題漢伶元撰。（略。主此序文および陳振孫の説を駁す。）其爲後人依託、卽此二語（禍水滅火）亦可見。安得以通鑑誤引遂指爲眞古書哉。

18 又有『雜事秘辛』一卷、以至一時遊戲之作也

三九一四

寫印本『大略』四云、有漢雜事秘辛一卷、記漢桓帝懿德后被選及冊立事。楊慎序云、得于安寧士知州萬氏。沈德符云、卽慎所僞作也。鉛印本は末句を「沈德符則以爲卽慎所僞造也」に作るはかは寫印本に同じい。

楊慎『雜事秘辛』序云、漢雜事一卷、得於安寧士知州董氏。前有義烏王子充印、蓋子充使雲南時篋中書也。然御覽諸書亦有漢雜事、而略不見收。此特載漢桓帝懿德梁皇后被選及六禮冊立事。而具姁入后燕處審視一段、最爲奇艷、但太穢褻耳。不謂冀威赫震人、猶得瀆選如此。卷首有秘辛二字、不可解、要是卷帙甲乙名目。予嘗搜考弓足原始不得、

及見約練迫祿、收束微如禁中語、則纏足後漢已自有之。言脫於口、追馴不及、聊志於此、用塞疎漏之謂。成都楊慎識。津逮秘書本

『四庫提要』卷一四三、小説家類存目云、漢雜事秘辛一卷、不著撰人名氏。楊慎序稱、得安寧土知州萬氏。沈德符敝帚軒剩語曰、卽慎所僞作也。叙漢桓帝懿德皇后被選及冊立之事。其與史舛謬之處、明胡震亨姚士粦二跋辨之甚詳。其文淫艷、亦類傳奇、漢人無是體裁也。『大略』、『史略』ともに「萬氏」とするのは「四庫提要」に據ったものらしい。『雜事秘辛』各本「董」に作る。

沈德符『野獲編』卷三三、婦人云、近日刻雜事秘辛、紀後漢選閱梁冀妹事、因中有約束如禁中一語、遂以爲始於東漢。不知此書本楊用修僞撰、托名王忠文得之于土酋家者、楊不過一時遊戲。後人信書太真、遂所惑耳。

(一九八七・九・二二)